

江戸後期狩野家の日本絵画観

朝岡興禎編著『古画備考』と狩野伊川院・晴川院筆「和漢流書画卷」(米国・ボストン美術館蔵)をめぐる

武蔵野美術大学 玉蟲敏子

科学研究費補助金研究「江戸時代における 書画情報 の総合的研究 『古画備考』を中心に」がスタートしてから本年度で5年目を迎える(第1期2003~2005年度、第2期2006年度~現在)。東京藝術大学附属図書館に所蔵される朝岡興禎編著になる原本48巻53冊を中心のテキストとし、それを研究代表者1名、分担者5名、協力者6名の合計12名からなる研究会によって各分野から横読みすることにより、これまでに様々な新知見が確認されている。本発表では、以上の研究成果を踏まえて、とくに以下の4点について考察を加えていくことにする。

合計11種からなる写本と活字本『古画備考』の底本の「図書寮印」本『古画備考』(東京国立博物館)の問題

朝岡興禎の情報源と情報提供者について 檜山坦齋と観嵩月の役割

『古画備考』の通時的書画観の特質について

『古画備考』の鑑識とフェノロサ

まず、『古画備考』については第1期の田島達也・並木誠士・畑靖紀氏の報告を受けて現在知られる写本類の整理を改めて試みる。『古画備考』については朝岡と同時代の市井の鑑定家との交流が、『古画備考』の特徴でもある「19世紀前半から半ばにかけて都市江戸で営まれた古画趣味を背景に成立した地域的な偏向性をもつ 書画情報 の集積書」を輪郭づけていることを、とくに筆者が分担した「光悦流」の箇所を例に取って具体的に論じる。『古画備考』については、「名画」の巻立てに顕著に認められる時系列的な書画観について、朝岡の父狩野伊川院と兄晴川院の合作「和漢流書画卷」(2巻、ボストン美術館)のうち、晴川院が執筆した和画卷(後鳥羽院本歌仙絵から狩野永徳筆松鶴図まで25図)と配列・筆者の選択基準・絵師と画題や様式のイメージなどの諸点において比較検討しながら、その特質を考える。最後の巻では、近代初頭に現れたフェノロサが木挽町狩野家の末裔から書画の鑑定法を学ぶに際して、『古画備考』を重視したことを、そのノートともいえる『印譜集』(ハーバード大学A・サックラー美術館、同燕京図書館)から窺っていく。これらにおいて、フェノロサは『古画備考』に掲載される印章をトレースし、まさに「K. B. .」の略号を傍らに記してその出典を明記しているのである。